返り花
小林

返り花

――私の俳句歳時記――

福田清人

明治書院

福田清人<ふくだ・きよと>
明治37年長崎生まれ。
東京大学卒業。近代文学・児童文学専攻。
日本近代文学館常任理事・日本児童文芸家協会会長。
『写生文派の研究』、『福田清人著作集』全3巻、『春の目玉』等がある。
現住所・東京都杉並区成田西2-6-15。

返り花 —私の俳句歳時記— 定価2,200円

昭和58年4月15日 印刷
昭和58年4月20日 発行

© 1983 K. Fukuda.

著者 福田清人
発行者 株式会社 明治書院
代表 三樹彰
印刷者 大日本法令印刷株式会社
代表 田中忠

発行所 株式会社 明治書院
〔101〕 東京都千代田区神田錦町1丁目16番地
電話 292-3741(代) 振替口座 東京 3-4991

0095-26002-8305

目　次

私の武蔵野……一
去年今年―昭和五十五年……二
東京生活五十年……一一
贈られた俳句……一九
高校門前……三四
雲雀落舎記……四三
惜　春……五三
教壇解放……六五
私の誕生の頃……七四
机辺の俳句歳時記……八二
去年今年―昭和五十六年……七
私の武蔵野……一五
中央線沿線……二〇
花　泥　坊……三八
雲雀の行方……四九
漱石文学の花々……五九
歌仙奉納……七〇
七十の若さ……七九

伊豆の山小屋……八五
伊豆の宿……八六
伊豆の山小屋で……九六
我が方丈記—大室高原日記……八九
伊豆の野の道 山の道……一〇〇

旅情……一〇七
北の旅……一〇八
山寺—石巻……一一七
岡山より下津井の港まで……一二七
長崎紀行……一三七
大歩危・小歩危越え……一四九
山口・萩で独歩を偲ぶ……一五八
広島の宿……一七〇
モントレー通信 その二……一八一
岩手の旅……一九二
さいはての島……二〇三
望郷の記……二一七
佐渡の両津—新潟……二二
信州・山田温泉の一夜……二二
諏訪湖の花火……二三三
古都の旅—上林暁君に……二四二
リバープール通信……二五四
大村・長崎・島原……二六四
モントレー通信 その一……二七六
北海道の印象……二八八
北九州の旅……二九七
晩夏の壱岐……三二四

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

俳人片影……二二三
高浜虚子氏の思い出……二二四
久保田万太郎さんのこと……二三三
旅先での草田男さん……二四二
滝春一句集「花石榴」……二五〇
石井露月と青年たち……二三九
秋桜子氏から戴いた本など……二三七
三十年前の楸邨氏……二四七
連句のこと……二五五
あとがき……二六一

私の武蔵野

武蔵野は春めく頃に牡丹雪

武蔵野の流れ澄む日に鴨飛来

万歩計腰に武蔵野小春道

武蔵野の落葉する日に鉢の木も

去年今年——昭和五十五年

「去年今年（こぞことし）」それは俳句の季語でもあるが、山本健吉編の「最新俳句歳時記」をめくってみた。

その解説には、「あわただしく年去り年来る意にも用いる」とあり、「新撰俳句歳時記」（明治書院）には「一夜にして年の改まること。去年今年とつづけて、去る年、来る年のあわただしさを感慨深くおもう言葉」、また昭和八年刊改造社の「俳諧歳時記」には「年は改りたれども、なほ旧年をなつかしむ気分」とあった。新しい例句中には、有名な、

去年今年貫く棒の如きもの　虚子

を初め、

古ぼけし枕時計や去年今年　白水楼

いそがしき妻も眠りぬ去年今年　草城

命継ぐ深息しては去年今年　波郷
去年今年とて足音の風に鳴り　八束

等が見られ、改造社版には、

雲横に去年の今年の花や空　鬼貫
一樽の酔ひにも去年と今年かな　鳴雪
寄する波引く波ながら去年今年　俊晃

などの句が見られた。

私の場合は、この季語にかかわりなく、過した一年の足跡の回想めいたことを書く。

さて、この年は五月八日、私の生まれ故郷の長崎県波佐見町で、私の「春の目玉」の文学碑を建ててくれた。それは思いがけないことで、私は二、三の文学者の碑陰の撰文を頼まれて書いたことはあったが、自分の碑など建つとは思いもよらなかった。その建碑式に出席したが、同時に名誉町民に推挙され、その式があった。この年の私の一つの記録である。

その折、たまたま、中学の同窓会が近くの温泉町であったので出席した。十四名の出席者があったが卒業後六十年ぶりで、その半ばの顔ははっきりしなかった。それは私は中学卒業後、他郷暮らしであり、二、三人を除いてはお互い会う機会がなかったせいでもある。

また、私の小学生時代過した長崎港外の岬にある母校も訪ねてみた。そこでも短い話をさせられたが、小学生たちの服装も都会の子とほとんど変わらず、私の小学生当時のような、はなたれ小僧もみなかった。時のうつろいをつくづく感じた。

この帰郷のほか、旅らしい旅は、晩秋の頃、三、四日弟夫婦と私も妻を伴って、軽井沢から、小諸方面に出かけた。こうした兄弟夫婦の旅は初めてであった。軽井沢には六、七年前の夏、ちょっと出かけた事があったが、ほとんど不案内であった。晩秋のその土地は、まことに静かであった。山道の落葉をふんで、室生犀星、正宗白鳥、有島武郎の文学碑なども訪ねてみた。その人たちの山荘は、今はとりこわされて、その址に碑が建っていた。有島の事件は私の高校生時代で、大きな衝撃だった。朴の落葉をふみながら、その事を連れに語った。

十月の末というのに浅間山の頂あたり一筋二筋雪渓の線が光っていた。夜明け、東の方の空が明るくなり、その下の山脈は黒くつづいていると、浅間の山肌は、しばらくあかね色に変わって美しかった。

小諸へ走る車の途中、追分あたり、中仙道の旧道も通ってみた。小諸は三度目だが、こんどは二十数年ぶりで、懐古園の藤村記念館には、小諸時代の関係資料がよく集められて

いた。

碓氷峠にも行ってみた。その近くの見晴し台に、二、三十人の人が集まって、なにか式典のもよおしのようであった。新しい大きな胸像が台上にあった。タゴールだという。偶然、その除幕式に行きあったのであった。

その場所にどういうわけで、タゴールの胸像がおかれたのか、理由をききそこなった。

著書は、ことしは前年を費やした「松尾芭蕉」を「ぎょうせい」の「世界の伝記」全五十巻中の一巻として一月に出した。このシリーズには、あと「福沢諭吉」などをひきうけていたので、一年ほど書きつづけて脱稿したが、新春早々刊行される予定である。

福沢を書く機会に、幕末や明治開化期の文献をいくらか読んだが、そちらにひかれて、かんじんの執筆はなかなかはかどらなかった。

講演は、あまり好きでなく、近年できるだけさけてきたが、それでも何回か壇上に立たされた。

五月八日帰郷の際、中学校で中学生と父兄に「郷里と私」といった話をし、戦前十年ほど講師をつとめた日大芸術科で、十月七日「児童文学について」、十月十八日東京都文学博物館の「近代詩歌展」開催中同所で「小説家の俳句—漱石と芥川など」を、その翌日に

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

は三、四年前までいた実践女子大学の国文学会で「思い出の作家たち」といった話をした。

「文芸広場」の創作や童話の選も、長いことつづけてきたが、他に十数年間、年一回のO社のコンクールの小説の選もしている。中に「文芸広場」の誌友の名を見ることもあり、それが優秀だとうれしい。一昨年は一月十五日の授与式で、詩の一席入選者から誌友だと挨拶されたことがあった。昨年も詩の一席入選者は誌友だったが、病気で欠席していた。小説は昨年も今年も三席に推した人がいた。

いろいろな児童文学賞の審査委員も依嘱されているが、そのため新しい単行本を読まねばならない。おかげで今の児童文学の動向を知るいい機会だと思っている。

「選は創作だ」という意味を高浜虚子は云ったそうだが、しかし、エネルギーをそちらの方にとられてしまうことも反省してはいる。

年末に近い十一月二十九日の私の誕生日にはこの数年来、かつて私の教室にあって、特に親しかった連中と毎年その日集まっていたが、ことしは、一つの節目にあたるので、少し幅を拡げようと、教え子たちが云い出し、これに日本児童文芸家協会の有志なども加わって、祝いの会をやってくれる。「文芸広場」の誌友にも十人ばかり知らせてもらった。金婚式にも当たる年だが、そのことは、案内状には記してもらわなかった。

その記念に小冊子の句文集を私家版として配ることを思いついて、「文芸広場」の星ノブさんに、編集をたのんだ。題は「坂鳥」とした。古い歳時記をひもどいてふと見つけて珍しいと思った季語だが、あまり作られないらしい。

遠き巣へ坂鳥一羽の思ひかな　清人

五月、故郷から帰京の日、手帖に記した拙吟である。

坂鳥——やさしいような言葉だが、もし、はっきりしなかったら、辞書を引く楽しみにおまかせしよう。

（昭56・1「文芸広場」）

去年今年——昭和五十六年

禿び筆を洗ひ直さん寒の水

など健気な気持ちを前年の暮ごろ手帳に書いてみたが、大したこともなくこの一年は過ぎてしまった。旅心は時おり浮かんだものの、出不精となって、僅かに桜前線が伊豆に近づ

く頃、ちょっと滞在していた同地の大室高原の山小屋から南へ足をのばして熱川へでかけ二、三日いたことと、新緑の頃、三、四日八ヶ岳山麓に旅しただけであった。

座職同様の仕事なので、足が弱ってきたので、これではならじと、発心して、近くの善福寺川畔に早朝散歩に出かけ、そこで行われている町内のラジオ体操に加わって手足を動かしてみたりしたが、それも春から秋にかけてばかりで、寒くなると止めてしまった。外出にステッキをつき出したのも、この春ごろからである。が、老人じみていやだから、曇天の日には、その代わりに傘をついて出かけたりしている。

著書は、「ぎょうせい」の「世界の伝記」全五十巻中の一巻として、前年一年がかりでまとめた「福沢諭吉」が一月刊行されたが、あと一冊ひきうけていた「西郷隆盛」を出したのが八月であった。

その資料で知ったことだが、西南戦争での官軍側の死傷者総計一六、〇九五人、西郷側は合計約一五、〇〇〇人、大した犠牲者の数であり、戦費も官軍だけで四千百五十六万七千余円で、当時の国家予算税収入の約三分の二に及んでいる。まさに天下分け目の戦いであった。

私もいちおう近代文学研究者の列に加えられているにもかかわらず、維新前後の事情に

うといので、少し詳しくその辺を知りたいと、福沢と西郷の伝記をひきうけてそれを探りながらこの二、三年は過したのであった。

机辺その他を整理していると、戦後、頼まれて郷里長崎県下の校歌を幾つか作詞した原稿や印刷して送られた紙片が方々から出てきた。集めてみると三十余校あった。せっかく作ったのだから散逸するのもいかがかと思い、小冊子にまとめておこうと思いつき、作曲者の名前など不明な分はその学校に問い合わせて、長崎県下校歌集と題した私家版を百部ほど作り、それぞれの学校にも一冊ずつ贈ったりした。

今年は不思議に俳句と縁のある年でもあった。「俳句とエッセー」誌の一月号から、十五句ほど送れという依頼があったので、臆面もなく日頃ポケットに入れて持ち歩く手帳から即興の句をひろい出して送ったが、その後、朝日新聞の日曜版に俳句にふれた随筆を書けというので「贈られた俳句」と題した短文を五回ほど書いたのは三月であった。それは朝日新聞学芸部編で「一句百景　俳句と私」と題して、同欄の寄稿者二十数氏との合著となって十一月、文化出版局から出版された。

合著といえば「北海道文学全集」別巻に、昭和二十九年頃書いた「近代日本文学紀行」中の「北海道」編も、収録されて、十一月に刊行された。

なお、朝日新聞に随筆連載中、秋から俳壇時評を書かないかと云われた。その誘いは前にも一度受けたことがあったが、俳壇の垣の外に私はいるので辞退したのだったが、重ねてのことだったし、密着していない者がかえっていいと云われ、半年も余裕があるのでその間準備すれば書けるだろうと思い、ひきうけることにした。こうして十月から月二回、勝手なことを書きだしたが、僅か二枚と五行の短い原稿だが、その十倍の原稿を書く以上の苦労をする。おかげでいくらか俳壇の事情も解ったが、私の机辺はそれまであった明治維新資料から、代わって句集や、俳誌でいっぱいである。

五月三十一日には阪本越郎君を偲ぶパーテーが平河町の海運ビル内で行われた。早くも十三回忌に当たる。

七月二十四日は白金台の都ホテル東京で中村草田男氏の傘寿祝賀会があったので、私も出席した。草田男氏は少々足が弱られたようであったが気迫はすさまじく、若い日国木田独歩の「牛肉と馬鈴薯」を読んで影響を受けたことから、話しだされた。草田男氏が独歩に影響されたことは、初耳であった。

木俣修氏は長らくあった教職を辞し、いささか健康も害されたというので、晩秋の午後見舞に出かけた。しかし元気そうで、朝三十分ばかり散歩などしているということで安心

した。その後角川書店の「短歌」の二月号は木俣修特集だそうで、私にも執筆依頼がきたが木俣さんとの親交には、「文芸広場」の会議やかつての旅行が大きい仲だちをしている。それは中村さんも同様で、先頃の角川書店の「俳句」の中村草田男特集にはもっぱらそのことを書いたのであった。

（昭57・1「文芸広場」）

東京生活五十年

大正十五年春、東大に入学した私は、それ以後東京生活を送っている。今年でちょうど五十年目ということになる。

大学時代三年間は、東中野の大村学寮という郷里関係者を容れる寮にいた。生垣をへだてて隣りは野口米次郎の邸であった。二、三度東中野の駅への路上でこの詩人の姿を見たことがある。長髪をなびかし、昂然と天を仰ぐような姿で歩いていた。

昭和四年に大学を出たが、就職難の時代であった。学生でなくなった身では寮を出なけ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo